白石史跡探訪

片倉小十郎と真田幸村

大坂夏の陣図屏風
（大阪城天守閣蔵）

片倉小十郎

初代　片倉小十郎景綱（一五五七～一六一五）

出羽国置賜郡下長井宮村（山形県長井市）に米沢八幡宮神主の子として生まれました。伊達輝宗に見出され、終生政宗に仕えました。政宗に小田原参陣を決意させ、その智将ぶりは「国家の大器」として豊臣秀吉、徳川家康からも高い評価を得ました。伊達家随一の名参謀「小十郎」の名は当主の通称となり、天下の大名となりました。

慶長七年（一六〇二）白石城（一万三千石）を拝領。

二代　片倉小十郎重長（一五八四～一六五九）

元の名は重綱であったが、三代将軍家光の嗣子家綱の諱字を避けて重長と改名。徳川幕府の存亡をかけた大坂夏の陣では、伊達の先陣としてその武勇を発揮し、強豪真田隊と激闘。「鬼小十郎」の名を天下に響かせました。この戦いの際、真田幸村から子女を託され、阿梅は後に重長の後室となりました。

三代・片倉小十郎景長（一六三〇～一六八一）

松前安広を父とし重長の嫡女喜佐を母とします。仙台藩を揺るがした寛文事件（伊達騒動）では奉行として藩政を仕切り、伊達六十二万石を救いました。

政宗が白石城攻略の際、景綱が本陣を構えた愛宕山に、景綱、重長の墓を改葬しました。

片倉小十郎景綱画像（仙台市博物館蔵）

鬼小十郎

～敵将小十郎に我が子を託した幸村～

片倉小十郎景綱は、伊達政宗への忠誠心から、我が子が生まれたら直ちに圧殺するつもりだと言ったという。それを聞いた政宗がそれを止めこの世に生を受けたのが二代重長です。重長の初陣は慶長五年（一六〇〇）の白石城攻めで見事本丸への先登の功を挙げました。

大坂夏の陣、八日月と愛宕山大権現守護所と書いた前立物をつけて出陣しました。黒釣鐘の大馬験を掲げ、伊達の先陣を切った姿が表紙の屏風に描かれています。道明寺口において大坂城から出撃してきた薄田隼人正兼相、後藤又兵衛基次の軍と相対し、これを打ち破り、その後、真田幸村と激戦を繰り広げ、鬼小十郎の名を天下に馳せ、片倉隊・伊達勢日本一の評価を受けました。

大坂城落城前夜、自らの死を覚悟した幸村は、敵将重長を知勇兼備の将と見込み、子女阿梅らの後事を託しました。重長は阿菖蒲、大八らも白石城二の丸において密やかに養育したという説もあります。長じて、阿梅は重長の後室となり、阿菖蒲は田村定廣（後の片倉金兵衛）の妻に、大八は片倉四郎兵衛守信と名乗り片倉家家臣から後に伊達藩士に取り立てられ、正徳二年（一七一二）守信の息子、辰信の時に真田姓に復しています。

大坂夏の陣図屏風・伊達政宗隊
（大阪城天守閣蔵）

片倉家御廟所

石畳を敷いた床面の上に、十体の大きな石像と一基の墓碑が、花崗岩の玉垣の内に整然と並んでおり、東北の陪臣の墓所としては他には見られない物といわれています。

三代片倉小十郎景長は、片倉家代々の城主の墓所を白石城の見える愛宕山山麓に決め、初代景綱と二代重長の墓を、延宝八年（一六八〇）景綱の命日に当たる十月十四日に傑山寺から改葬し、阿弥陀如来座像を墓標としました。以後、九代まで石像を城主の墓標としましたが、十代宗景（明治四年没）は、角柱の墓碑です。城主夫人は、傑山寺や当信寺など廟所外に葬られていますが、七代村廉の昌子夫人は、仙台藩主吉村公の息女お郷様とあって、城主同様に葬られています。

廟所の傍らには、初代景綱に殉死した六名の家中武士の墓碑と明治維新後、北海道開拓の際に建てた片倉惣家中碑があります。

延命寺

～白石城厩口門

白石城厩口門は、その名のとおり、厩曲輪に入る門ですが、二階に幅の広い格子を設け、その両側と階下に狭間を設置し、北側から迫る敵に対して、坂口門と共に本丸を守る重要な防衛拠点としていました。白石地方が上杉領や蒲生領だった時代における、北方の敵は伊達家であり、この門が大手門の役割を果たしていたと伝えられています。明治維新後、延命寺山門として三間一戸、二階建瓦葺が移築されました。境内には安珍地蔵尊（ころり地蔵尊）があります。

（国登録有形文化財）

傑山寺

～片倉家菩提寺～

白石城主片倉小十郎景綱が、慶長十三年（一六〇八）に片倉家の菩提寺として創建。初代景綱と二代重長はこの寺に葬られていましたが、三代景長が廟所を愛宕山に定めて改葬しました。十一代以降の当主および歴代の奥方はここに葬られています。景綱の墓は、一本杉を墓標にしたと伝え、現在も成長を続けています。また松前家や力士の初代谷風の墓もあります。平成二十四年に景綱公の銅像が文化勲章受章者　中村晋也氏の作により建立されました。

真田信繁（幸村）

～真田日本一の兵～

真田信繁（幸村）は、信州上田城主・真田昌幸の次男として生まれました。幸村は関ヶ原の合戦の際、兄信之と袂を分かち父昌幸とともに上田城に籠もり、進軍中であった徳川秀忠の率いる大軍を退けたものの、西軍が戦に敗れてしまい、父とともに九度山へ蟄居となり、十四年にわたり不遇の日々を送りました。大坂の陣では豊臣方の武将として大坂城に入城し、冬の陣においては真田丸を築き徳川の攻撃を防ぎきり、夏の陣では徳川家康を追いつめましたが、後一歩のところで戦に敗れてしまいました。その見事な戦ぶりから「日本一の兵」と称えられています。幸村は落城前夜自らの死を覚悟し、敵将である片倉小十郎重長に子女達の将来を託しました。

阿梅は父幸村の位牌を置き、菩提を弔うために月心院（現在は廃寺）を建立しました。愛宕山山麓にある阿菖蒲が嫁いだ田村家墓所内には幸村の供養墓が建立されています。

大坂夏の陣図屏風・真田幸村隊（大阪城天守閣蔵）

田村家と阿菖蒲

伊達政宗の正室愛姫は三春城主二十九代田村清顕の娘です。田村領は豊臣秀吉に没収され、その孫の定廣は『牛縊』と改姓し、伊具郡に身を潜めていましたが、愛姫の命により、片倉小十郎景綱が白石に招きました。

定廣は片倉喜多（小十郎景綱の異父姉）の名跡を継ぎ、片倉金兵衛と改名し、真田信繁（幸村）の遺児阿菖蒲を妻として、仙台藩士となりました。

定廣が田村家の墓と幸村の墓を愛宕山山麓に建立し、一族の菩提を弔い、没後阿菖蒲と共にこの地に葬られています。

田村清顕の墓（正面）と阿菖蒲の墓

真田信繁（幸村）の墓

阿梅・大八

真田信繁（幸村）の遺児、阿梅と大八の墓が当信寺にあります。

片倉家の菩提寺は傑山寺ですが、阿梅らは当信寺に埋葬されました。墓石は如意輪観音像を象っており、その形が歯痛のため頬を押さえているように見えることから、虫歯に苦しむ人たちは、この墓石を削り、飲むと良く効くとの迷信が生まれました。その隣には大八の墓が建立されています。藩政時代・白石郊外の森合に、月心院がありました（現在は廃寺）。『刈田郡誌』によると、重長後室阿梅の方が建立した寺で、「真田幸村の位牌を置き、亡父の菩提を弔いしなり、幸村法号・月心院単翁宗伝大居士」とあります。

阿梅の墓

阿梅の墓（左）と 大八の墓（右）

当信寺

～白石城東口門～

山門は白石城東口門で三間一戸二階建瓦葺を移築したものです。正式には二の丸大手二ノ門といい、大手口から城内に入り、本丸へ入る関門でした。ご本尊の阿弥陀如来像は、大坂夏の陣の時、片倉家家臣により大坂天王寺より招来されたものです。境内には子安地蔵があり、八月二十三日の祭典の前後三日間に必ず雨が降るとされ、ぬれ地蔵さんと親しまれています。

（国登録有形文化財）

（国登録有形文化財）

清林寺

～真田家遺臣が開基～

『刈田郡誌』には、三井豊後（善休）が、京都西本願寺准如上人の弟子となり、寛永十一年（一六三四）一宇を創立して善久坊と号したとあります。万治二年（一六五九）本願寺良如人が清林寺と改称しました。善休は三井家の家譜によると真田家遺臣・三井奉膳の二男とあります。

寺紋は真田家の紋所「六文連銭」です。

白石城

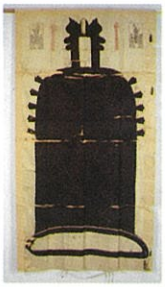
慶長七年（一六〇二）に仙台城の支城として片倉小十郎景綱が入城してから十一代約二六〇年にわたり片倉氏が居城しました。元和元年（一六一五）の「一国一城令」後も城としての存続が認められました。明治維新の時は、白石城で奥羽越列藩同盟が結ばれるなど歴史が大きく転換する時にたびたび登場し、重要な役割を果たしてきました。明治になり解体され、白石城東口門は当信寺に厩口門は延命寺に移築されました。平成七年（一九九五）に、文政六年再建後の三階櫓（天守閣）と大手門を史実に忠実に日本古来の建築様式に基づき木造で復元され、白石市のシンボルとなっています。

■入城料　大人：400円　小人：200円

少納言喜多

片倉喜多は、片倉小十郎景綱の異父姉で、伊達政宗を保育し文武兼備の日本三賢婦とたたえられています。

弟景綱のため白地に黒鐘の馬印を図案し与え、「名を天下に鳴り響かせよ」と励ましたという伝説があります。



白地黒釣鐘旗
（仙台市博物館所蔵）

喜多の墓

鬼小十郎まつり

鬼小十郎まつり
PR動画

武家屋敷

（宮城県指定文化財）

旧小関家は、白石城の北、三の丸外堀にあたる沢端川に面しており、かつては中級武士の屋敷でありました。

小関家は奥方用人として活躍した片倉家の家臣で、この屋敷は享保十五年（一七三〇年）に建築されたことが確認されています。

平成三年に白石市に寄贈されたのを機に全面的に修復されました。

■入場料　大人：200円　小人：100円

問い合わせ
白石市商工観光課
〒989-0292　宮城県白石市大手町1-1
TEL 0224-22-1321 URL http://www.city.shiroishi.miyagi.jp/

白石市観光案内所
・白石駅構内　TEL 0224-26-2042
・白石蔵王駅構内　TEL 0224-24-5915

1912-40000